

韓国・言論学の研究動向：2020 年度

小林 聡明*

はじめに

本稿は、韓国における言論学（メディア、ジャーナリズム、コミュニケーション研究領域）の研究動向について紹介し、若干の論評を加えようとするものである。昨年度と同様に、韓国の主要学術誌（『韓国言論学報』韓国言論学会、『韓国言論情報学報』韓国言論情報学会、『言論と社会』社団法人：言論と社会）に掲載された論文すべての概要を紹介する。なお、本稿では、2020年2月から12月に刊行されたものを対象とする。以下、2020年度の韓国における言論学の研究動向について、5つのやや外形的な特徴を示したうえで、今後の研究の広がりに関して、一つの視座を提示してみたい。

韓国の研究動向に見られる特徴として挙げられるのは、第一に、共同執筆されている論文が多く見られることである。こうした特徴は、昨年度までも見られたが、今年度は、共同執筆者に大学院博士課程の院生だけでなく、修士課程の院生のほか、学部生も名前を連ねていた。このことは、学術誌への投稿が博士号取得者に限定されていた時代から、学部生にまで間口が広げられた時代へと変化し、韓国の学術界において、開放性が、さらに増している可能性を想起させる。一方、学術誌への投稿者が減少している可能性も推察される。事実、韓国では、国内の大学院博士課程への進学者が減少している。背景には、韓国の教育・研究機関において博士号取得者向けの就職口が慢性的に不足していることがある。限られた就職口をめぐる激しい競争が起きており、そこでは、アメリカなどに留学して博士号を取得した者が、「国内博士」と言われる韓国での博士号取得者よりも、圧倒的に有利であると言われている。さらに就職口を得るためには、韓国語よりも英語の学術誌への論文掲載が、きわめて有利にはたらくため、英文誌に投稿する傾向が、近年、強く見られる。このことは、厳しい業績評価にさらされている韓国のテニユア研究者にも当てはまる。こうしたことが、韓国語の学術誌への投稿者が減少していると推測される理由として指摘できる。第二に、昨年度までの研究動向にも見られたように、計量的なアプローチによる研究が多く見られ、韓国の言論学分野において、ビッグデータの活用や SNS の分析が攻勢を極めていることである。とはいえ、注目すべきは、本稿で取り上げた学術誌三誌に、顕著な違いが見られることである。たしかに『韓国言論学報』（韓国言論学会）には、計量的な研究が多数、掲載されている。一方で、『韓国言論情報学報』（韓国言論情報学会）や『言論と社会』（社団法人：言論と社会）は、むしろ質的分析に基づく研究論文が、多数掲載されている。こうした違いが存在していることについて、韓国言論学会と韓国言論情報学会が、それぞれどのような性格をもった学会であるのかといった側面などから考察していく必要があるが、ここでは、この必要性を指摘するだけに留めておきたい。第三に、ジェンダーに関連したテーマの論文が、昨年度と比べて減少していることである。韓国社会、とりわけ学術界でジェンダーへの関心が低下したとは言えないため、今年度が、偶然、掲載論文数が少

*こばやし そうめい 日本大学法学部新聞学科 准教授

なかったのかは、来年度以降の動きを注視していく必要があるだろう。昨年度と同様な傾向にある点として、第四に、歴史研究が少ないこと、第五に、海外状況をテーマとして分析した論文の少なさを挙げることができる。とはいえ、香港の民主化デモというアクチュアルな事象をテーマとして、韓国の民主化運動と関連付けながら、歴史的な文脈を織り込みつつ、問題意識に裏打ちされた分析を行った李ヘスの論文「記憶の超国家的移動と多方向的接合：香港市民らの闘争が呼ぶ民主化運動の記憶」『韓国言論情報学報』（102巻）が掲載されていたことは記しておきたい。

最後に、今年度の研究動向の特徴として、韓国における言論学の今後の方向性を模索する動きが、これまでの韓国言論学研究の歩みを批判的に捉え返す営為としてあらわれている点を指摘しておきたい。釜山大学教授のチョ・ハンジェは、「韓国言論学の過剰と欠乏」『言論と社会』（第28巻第4号）のなかで、韓国言論学の目標について、「韓国の現象をうまく説明する、理論の開発」であると主張する。だが、韓国言論学では、何かが多く（過剰）、何かはとても少ない（欠乏）状態のため、こうした目標を追求するには困難が生じていると指摘する。チョによれば、韓国言論学の過剰と欠乏は、「結果の過剰と過程の欠乏」「審査の過剰と討論の欠乏」「ジャーナルの過剰と学会発表の欠乏」「垂直的関係の過剰と水平的関係の欠乏」「量的方法の過剰と質的方法の欠乏」「方法の過剰と方法論の欠乏」だという。これらを踏まえ、チョは、方法論的多元主義を提起し、ジャーナリズム研究が「方法論より問題中心」となる必要性を説く。こうした「（制度）構造的側面」の改革だけでなく、研究者間の対話と討論を喚起する多様な方法を考案する重要性など、韓国社会における知的文化の一部である「学術文化」にも改革を迫るチャレンジングな問題提起を行っている。重要なことは、こうした問題提起をめぐる動きが、昨日今日、突然、韓国言論学分野の内部からなされたわけではなく、同分野において、少なくとも20年近く前から地下水脈のように絶えず流れ、存在していることである。例えば、姜明求（ソウル大学言論情報学科教授、現、名誉教授）は、すでに論文“*There is no South Korea in South Korean Cultural Studies: Beyond the Colonial Condition of Knowledge Production*”（Myungkoo Kang, *Journal of Communication Inquiry* 28(3):253-268, July 1, 2004）のなかで、1980年代から2000年代に入るまでの韓国言論学のパラダイムを批判的に検討し、同分野に見られる西洋中心主義的なまなざしや、そこに構造化されているイデオロギーの問題を指摘していた。チョの問題提起も、これまで韓国言論学のなかに残置されてきた研究者の「不満」が、さらに加熱され、顕在化したものとして捉えることができよう。

韓国言論学の歩みに対する批判的な捉え返しが、同分野における歴史研究の側面からも行われている。まず、釜山大学教授の蔡白は、論文「民族紙神話の生成と屈折」『韓国言論情報学報』（102巻）において、植民地朝鮮で発行されていた『東亜日報』と『朝鮮日報』に対する評価の再解釈を迫ることで、韓国言論学の歩み、とりわけ歴史研究分野のパラダイムや蓄積を批判的に捉え返すものとなっている。また、忠南大学教授の車載泳は、「ウィルバー・シュラムの朝鮮戦争心理戦研究とコミュニケーション研究の制度化」『韓国言論情報学報』（第99号）で、冷戦とコミュニケーション研究が、どのように密接に結びつきながら、韓国言論学のパラダイムに影響を与えてきたのかについて考察した⁽¹⁾。それは、韓国言論学が、どのような性格を有しているのかについて、歴史的な文脈から検討することで、そこにまわりついている政治性を踏まえ、今後の韓国言論学研究の方向を照らし出す、一つの重要な手がかりを与えるものとなっていた。

こうした韓国における批判的な捉え返しは、日本でも東京大学教授の吉見俊哉や京都大学教授の

佐藤卓己による一連の研究のほか、本学新聞研究所が行った共同研究プロジェクト『戦後日本における新聞学／コミュニケーション研究の歴史的展開に関する初期的分析－新聞学科の設立とアメリカの知的パラダイムに焦点をあてて』（小林聡明、石川徳幸、米倉律、佐幸信介）などで同様の営為を看取できる。だが、これら日韓に見られる捉え返しは、主としてアメリカとの関係性のなかで試みられてきたといっても過言ではない。ある意味において、問題意識やパラダイムを歴史的な必然性から共有している日韓のアカデミズムにおいて、アメリカや欧州との関係を考慮に入れつつ、東アジアという時空間に地平を広げながら、こうした捉え返しを行うこと。韓国の研究動向を紹介することで、このことの重要性を提起し、本稿を閉じることとしたい。

以下、各誌に掲載された論文の概要についてタイトルとともに紹介する。

1. 『韓国言論学報』

(1) 第64巻第2号 2020年2月

①ニューメディア

「YouTube におけるミュージックビデオのファンダム分析」(崔スンウク、崔ソンイン、李ジェヒョン) は、YouTube で、ミュージックビデオ (M/V) という映像コンテンツが消費され、新たに変形したコンテンツとして作られ、拡散される様相を実証的に、そして、具体的なデータを通じて確認し、これらをファンダム文化の観点から検討した。

②ジャーナリズム、コミュニケーション

「公営放送 TV ニュースの匿名取材源の利用：KBS <ニュース9>と BBC <10時ニュース>の比較分析」(呉ヘジョン、金ギョンモ) は、英 BBC <10時ニュース> (News at 10) の匿名取材源の利用を比較準拠して、KBS <ニュース9>の匿名報道の実態について分析した。

(2) 第64巻第2号 2020年4月

①ジャーナリズム、コミュニケーション

「製品の否定的情報についての公衆のコミュニケーション反応行動研究：企業名声と接触媒体類型 (ポータル・サイト、フェイスブック) を中心に」(李モラン、李ヘス、韓ドンソプ) は、企業の名声によって当該企業の否定的情報に対する公衆のコミュニケーション反応行動が、どのように異なるのかについて検討し、企業の名声と当該企業の否定的情報が伝達される媒体類型が公衆のコミュニケーション反応行動に影響を及ぼす相互作用効果について分析した。「エネルギー転換政策の広報メッセージのフレーミングが、政策支持度に及ぼす影響研究：フレーミングと解釈水準の相互適合性の探索を中心に」(高テソン、金ボヨン、権サンヒ) は、社会的葛藤を触発している原発政策のフレーミング効果に関する実証的な研究を行った。「侮辱罪の国内判例についての経験的研究」(朴チャンヒ) は、韓国社会における実際の侮辱罪訴訟の事例について経験的検討を行い、現実の侮辱罪が、韓国社会の発言の自由および共同体礼節規範に及ぼす影響と侮辱罪を通じて、韓国社会の言説権力が、いかに作用しているのかを探索した。「ジョン・スチュアート・ミルの個別性再考のための対話形式としての討論の自由」(朴ヘギョン、李ホギユ) は、思想と討論の自由を分かちがたいものとするミルが、討論の自由を重要視する点に注目し、その理由と背景について検討

した。「ポータル・ニュース発行時間を通じて見たマスコミのニュース生産慣行：2000年から2017年までのNAVERニュース・データについての探索的分析」(宋ヘヨプ、ヤン・ジェフン、呉セウク)は、記事の流通方式の変化が、どのように記事の生産と流通慣行を変えていったのかを明らかにした。

②放送、コンテンツ、文化

「フーコーの統治性から分析した韓食世界化言説：文化政策、韓食文化館、メディア再現を中心に」(リュ・ドンヒョプ、洪ソンイル)は、韓国料理のグローバル化言説の裏面にある権力、欲望、態度、知識の経済的合理化プロセスを確認し、これを通じて、今日の韓国社会における文化政策の執行と、主体の再編のなかの新自由主義の統治性の影響力を明らかにした。

③PR、広告

「オンライン・グルメ放送(Mukbang)の書き込み研究：食行動関連の認識についてのビッグデータ分析」(安スンテ、イム・ユジン、李ハナ)は、ビッグデータを用いて視聴者の書き込みの反応を分析することで、オンライン・グルメ放送コンテンツが、視聴者の肥満と食行動に及ぼす影響力を検討した。

(3) 第64巻第3号 2020年6月

「デジタル人格権の侵害とインターネット・サービス事業者の責任についての比較法研究」(朴イラン)は、利用者の掲示物による人格権侵害に焦点をあて、インターネット・サービス事業者責任について比較法的な側面から分析した。「PM2.5削減行動の意図に影響を与える要因研究：計画された行動理論(TPB)と規範活性化モデル(NAM)の統合作用」(ク・ユンヒ、安ジス、盧ギヨン)は、PM2.5削減行動の意図について、道徳的規範とともに検討することで、計画された行動理論の説明力を確保しようとする研究であった。

(4) 第64巻第4号 2020年8月

「Insta-toon がデート暴力判決に及ぼす影響と、その過程に関する研究：ニュース記事との比較を中心に」(李スンヒ、安ヒョンス)は、Insta-toon のジャーナリズムを補完する役割という機能性についての探索的研究として、Insta-toon のニュース記事が、受容者の社会イシューに対する認識変化に及ぼす影響を調査した。「言論の理念性向にかかる‘コロナ19’報道フレームの比較研究」(朴ジョヒョン)は、新型感染症に対するマスコミの初期報道の姿勢から、継続的に行われている議題設定過程でのフレーム、または理念性の介入可否について研究した。「青少年の否定情緒が、成人用メディアへの没入に及ぼす影響：青少年スマートフォン以前の媒介効果を中心に」(朴ジヒョン、チョ・ジェヒ)は、成人用メディア利用と没入に影響を与える多様な文脈のなかで、攻撃性、憂鬱および社会的萎縮のような否定的情緒要因が、スマートフォン依存によって媒介されるとき、成人用メディアの没入に、どのような影響を及ぼすのかを検証した。「テレビドラマのなかの母性ファンタジーについての女性主義的考察：KBS ドラマ<椿の咲く頃>を中心に」(チョ・アラ、金ヨンチャン)は、ドラマ<椿の咲く頃>に現れた母の話の根幹を成す母性についての規定と規範

を分析した。「政治的無知についての無知：実際の知識と認知された知識が政治参与に及ぼす効果分析」(金ヒョンウ、李ジョンヒョク)は、政治知識水準と自己評価を核として、ニュース利用、政治対話、政治参与などが、どのように再構成されるのかを示し、政治的無知についての無知(過大評価)をもとに、政治対話と政治参与の構造を再文脈化し、再解釈した。「ポータル・ニュースと書き込みについての政派性の知覚が、ポータル・ニュースの信頼、影響力の知覚および選択的露出に及ぼす影響：保守と進歩利用者の相違を中心に」(玄ギドゥク、ジョン・ナクウォン、徐ミエ)は、政派的ではないメディアであるポータルの政派性の知覚と選択的露出という一見、矛盾した現象について、利用者の偏向した知覚に焦点をあてて説明した。「利用者の情報環境カスタマイズ化が時事知識と SNS 上の意見表現に及ぼす影響：政治性向にかかる選択的露出と偶然的異見露出の役割を中心に」(ユ・ヨン、クム・ヒジヨ、チョ・ジェホ)は、最近、ポータルや SNS 上で購読あるいは友達のつながりなどを通じたカスタマイズ設定が、政治コミュニケーション過程の重要な指標である知識と意見表現に、どのような影響を及ぼしているのかについて分析した。「誰がニュース・カスタマイズ化(customization)を利用し、市民力量に、いかなる影響を与えるのか：Need for Orientation、ニュース・カスタマイズ化、議題多様性の関係を中心に」(Zhien Lor、崔ジヒャン)は、ニュース・カスタマイズ化に焦点をあて、人々が、なぜカスタマイズ化を通じ、ニュースを利用するのか、そしてカスタマイズ化を通じたニュース利用が、市民力量に、どのような影響を及ぼす可能性があるのかを明らかにした。「災害報道フレームが受容者感情と認知に及ぼす影響：具体的感情の媒介効果、メディア様式と脅威信号機能性の調節効果を中心に」(イム・インジェ)は、現在の災害が、多様で、複雑に発生し、展開しているという事実注目し、人々が災害を認識し、備える過程で、コミュニケーション分野が、どのような役割をしなければならないのかについて検討した。「解釈水準と対応水準が気候変動対応行動意図に及ぼす影響：心理的距離の媒介効果と未来／即刻の結果考慮の調節効果を中心に」(咸スングン、金ヘジョン、金ヨンウク)は、解釈水準理論を拡張し、気候変動について、心理的距離に影響を及ぼす多様な変因の分析と、心理的距離の媒介効果の検証によって、対応行動を増加させることのできる多様な変因関係を明らかにした。「AI メディアと擬人化：AI 音声対話型エージェントの擬人化評価尺度開発研究」(イム・ジョンス、崔ジンホ、李ヘミン)は、AI メディアを媒介にした対話型エージェントとのコミュニケーション過程を擬人化の観点から理解するために、エージェントの擬人化水準を評価する尺度を開発した。「『コリアブ』(Koreaboo)：BTS Universe が憎いパズルの一つのピース」(元容鎮、パン・ヒギョン、李ジュンヒョン、Marisa Luckie)は、北米地域で韓国の大衆文化に過度な関心を置くファンを美化するために作り出された用語である Koreaboo 現象を、BTS ファンダム現象の一部と理解し、この現象を社会的なものに関連した徴候の事件として分析を試みた

(5) 第64巻第5号 2020年10月

「儀礼的、防御的、意図的：韓国の主要新聞エディターの事実確認を中心にしたゲートキーピング慣行研究」(金チャンスク)は、ゲートキーピング過程で進められる事実確認の慣行に着目し、韓国のマスコミにおいて、事実がそのまま確認されない記事、総合的真実とは距離がある記事が生産される原因を明らかにした。「コミュニケーション戦略としてのミラーリング効果：観点需要と外集団についての否定的感情を中心に」(安ジェギョン、閔ヨン)は、心理治療劇で用いられるミ

ラーリング・テクニックと政治心理学における無礼な表現研究をもとにして、ミラーリングを、ミラーリング・テクニックと無礼な語りが交差するコミュニケーション方式として概念化した。「新聞社のCSRは、新聞社の信頼度、言論信頼に、どのように影響を及ぼすのか：編集の責任とCSR活動類型を中心に」(李ヘソン、金スヨン)は、メディアへの固定観念や偏見が、マスコミやジャーナリストに影響を及ぼすように、ジャーナリストに対する肯定的な経験もマスコミやメディアの信頼に影響を及ぼせる点を拡張し、新聞社に対する信頼度がメディアの信頼に影響を及ぼす可能性を分析した。「国内コミュニケーション研究の統計分析方法の元凶と問題点：過去10年間の＜韓国言論学報＞掲載論文の内容分析」(李ビョングァン、金ジェミン、金ジュファン、チャン・ダヨン、権ナヒョン)は、韓国内のコミュニケーション研究において、現在までの統計分析方法の使用現況と傾向を検討し、その結果に基づいて、韓国内における量的研究の統計使用における問題点について議論した。「自我調節資源がメディア・マルチタスキング利用形態に及ぼす影響」(金リュウウォン、鄭セフン)は、メディア・マルチタスキング利用者が、メディアを利用する視点に込められた自我調節機能によるマルチタスキング利用形態の相違を検討し、マルチタスキング利用時間またはマルチタスキング・メディアコンビネーション(テレビ+スマートフォン、TV + PC)を予測した。「マルチメディア環境におけるニュース利用者のニュース選択過程と類型」(金ジュヒョン)は、20代から60代までの、それぞれ異なるメディアを利用するニュース利用者を対象に、深層インタビューを通じて、ニュース利用に関する文脈と選択プロセス、認識などを分析した。「国家経済についてのメディア議題構成：新聞と放送経済ニュース・データ(1998-2017)分析を通じて見た議題の顕著性と位階制」(李ワンス、シン・ミョンファン)は、ニュース組織や記者らが、どのようにイベントやイシュー、ソースを異なるものとして比較し、相対的な選択や強調、記述を行うのかについて説明する議題形成理論を適用し、韓国メディアが強調する経済トピックの位階について体系的に検討した。「新型コロナウイルス発生による経済危機評価についての非個人的影響仮説検証：経済単位と評価視点についての知覚分化を中心に」(李ワンス、崔ミョンイル、ユ・ジェウン)は、全世界に広がった新型コロナウイルス発生による経済危機について、人々が個人経済、社会経済、そして国家経済を、どのように異なって知覚するのかについて分析した。「ディープ・ラーニング基盤の動画処理アルゴリズムを通じた19代テレビ討論映像分析：候補者の登場頻度、表情、応答方向についての分析」(崔ユンジョン、鄭ユジン、ユン・ホヨン、金ミンジョン、金ナヨン、チェン・ル、シン・ジュヨン、李ジュヒ、金ナヨン、ヨ・ウン、カン・ジェウオン)は、大統領選挙のテレビ討論における政治家の登場頻度、表情、応答方向について、映像分析を通じて、明らかにした。

(6) 第64巻第6号 2020年12月

「モバイル寄付アプリケーション・メッセージ類型と寄付方式がモバイル寄付の意図に及ぼす影響」(金ユンギョン、朴ナムギ、シン・ウンス、チャン・ウンチェ)は、モバイル・アプリケーションが、利用者にメッセージを提供するとき、寄付に対する利用者の態度やアプリケーション利用の意図が、どのように肯定的に変化するのかを検証したうえで、モバイル寄付アプリケーション開発者に利用者が、寄付をするように誘導できる方案を提示し、利用者には多様な寄付の方法を示すことで、寄付に対するまなざしを変化させる契機を明らかにした。「視覚障がい者のフェイス

ブック利用：深層インタビュー研究」は、急変するスマートメディア環境において、情報脆弱階層に分類される視覚障がい者がフェイスブックを、なぜ、どのように利用するのか、フェイスブックで、情報や知識、情緒などの社会的資源を、どのように共有し、そうした共有行為の要因は、いかなるものであったのかについて体系的に分析した。「ソーシャルメディア上での言語規範が共有行為に及ぼす影響：南北首脳会談ツイッターに対する多層ハードル・モデル分析」(チュ・ホジュン、金ヨンチャン)は、2018年の第1回南北首脳会談時にツイッターで流通したメッセージを分析し、利用者による他者との共有行為に関する考察を行った。「K-ビューティー産業のカラーリズム」(朴ソジョン)は、韓国メディアおよびビューティー産業であらわれたカラーリズムについて、美白をめぐる言説を形成、媒介、強化してきた「メディア-ビューティー複合体」の観点から分析を試みた。「大韓民国は、これまでの20年間‘北朝鮮’と‘統一’を、どのように見ていたのか：言論報道ビッグデータ分析および国民認識終端研究」(朴ジョンミン、鄭ヨンジュ、チュ・ホジュン、金ヒョンウ)は、2003年以後の「北朝鮮」と「統一」が含まれたNAVER内の約40万件の記事の言語形態および感想と、同時期に行われた対国民意識調査標本を分析することで、政府と政派的なメディアによる記事内での言語的強度、情緒的表現頻度、情緒の方向性の相違を明らかにした。「我々はどのようにロボットを作り出していつているのか：2010-2019年のテレビニュースに登場した人工知能ロボットの伝達方式と特性に関する探索的研究」(孫スンエ)は、新たな技術が、ある社会に導入され、拡散されていくなかで、人間の選択が、技術の形態と発展方向、結果に、すべて影響を及ぼすという技術の社会的形成理論を基盤として、過去10年間のテレビニュースに登場したロボットの特性について実証的な分析を試みた。「企業の正当性と持続可能性コミュニケーション：持続可能性の情報公示の決定要因に関する比較分析」(尹テイル、辺ヘヨン)は、企業の税務情報データとGRI(Global Reporting Initiative)持続可能性公示データベースを利用し、持続可能な経営への正当性圧力が、韓国企業とグローバル企業の情報公開に、いかなる影響を及ぼすのかについて分析した。「韓国の10代青少年 YouTuber：制作者としての能動的利用者概念研究」(安ソジン、金ヨンチャン)は、韓国の10代の青少年 YouTuberが見せる制作およびYouTube活動の動機、制作・アップロード・コミュニケーション過程への知覚や、YouTube活動が自らの生活にもたらした肯定的、否定的効果についての知覚を分析することで、変化するメディア環境のなかで「デジタル・ネイティブ」である青少年の理解を助けようとするものであった。「知覚されたメッセージ効果性は、実際、メッセージの効果を、どれほど反映するのか」(李ビョンヒョン、鄭ソウン)は、説得キャンペーン・メッセージの効果を事前に予測するために、実務者が活用する知覚されたメッセージの効果性(PME)をめぐる方法論について考察した。

2. 『韓国言論情報学報』

(1) 第99号 2020年2月

「1960年代の韓国社会とジャーナリズム理念の性格」(金ナムソク)は、1960年代の韓国社会とジャーナリズムに影響を与えた理念を提示し、その性格を究明した。「ネットワーク時代の地域価値と地域放送プラットフォーム化に関する試論的探索」(金ジェヨン)は、OTTなど新しいサービスの成長によって存立自体が脅威にさらされている地域放送の新たな突破口を指摘した。「個人化されたサービス要因が使用者の持続的な利用意図の影響に及ぼす研究：YouTubeの技術需要モ

デルを中心に」(マリヤオ、権サンヒ)は、ビッグデータとアルゴリズムを活用した個人化されたサービスが、その利用行動に、どのような影響を与えるのかを解明した。「移住活動家を活用した多文化メディア教育プログラム開発のための試論的研究」(元スクギョン)は、先住民を対象にした多文化(メディア)教育を行う移住民出身の多文化講師にインタビューを行い、先住民対象多文化(メディア)教育の現況と、その問題点を明らかにした。「ポスト・トゥルースの認識論を越える：真実の共同体なのか、対話する共同体なのか」(ユ・ヨンミン)は、ポスト・トゥルースという問題的な徴候について解釈学的再認識を試みた。「潜在階層分析を通じたニュース利用者らの‘ニュース・メディア・レパトリリー’分類および効果」(李ガンヒョン、朴ジュンギユ)は、特定メディアを通じたニュース利用形態に焦点をあて、メディア間の境界を超えるニュース利用者の行為を「ニュース・メディア・レパトリリー」の観点から分類し、その結果で導出された4つのレパトリリー類型集団の特性と関連した変数の効果を明らかにした。「心理的・物理的距離と記憶の差異：4・16セウォル号惨事犠牲者追慕映画<君の誕生日>のなかの人物の記憶現実を中心に」(李ワンス、ヤン・ヨンユ)は、4・16セウォル号惨事の追慕映画<君の誕生日>に登場する事故の犠牲者である10代の青少年の死に対する個人と社会記憶の体系について分析した。「高麗末朝鮮初期における王権の問題と太宗の臺諫言論認識」(李潤馥)は、朝鮮王朝・太宗の全時期を対象に、初期(太宗の政治制度整備時期)、中期(肥大した公式権力に対する牽制および王権の安定期)、後期(太宗自身の後継問題と関連した葛藤期)に分け、『太宗実録』に現れた臺諫言論関連の代表的事件を中心に、太宗の臺諫言論活動に対する認識について分析した。「参与的ニュース利用の効果：メッセンジャー、SNSを通じたニュース利用とニュースおよびジャーナリストに対する信頼」(張ユンジェ、金ミラ)は、メッセンジャーとSNSを通じたニュース利用とニュースおよびジャーナリストに対する信頼感の関係と、その過程でニュースの共有および書き込みのような参与的活動の役割を明らかにした。「ウィルバー・シュラムの朝鮮戦争心理戦研究とコミュニケーション研究の制度化」(車載泳)は、シュラムが、心理戦研究プロジェクトを行うにいたった文脈とプロセスを分析し、そのプロジェクトの内容と結果の検討、そしてシュラムによるプロジェクトの遂行が、主流コミュニケーション研究の制度化に及ぼした影響を明らかにした。

(2) 第100号 2020年4月

企画論文・メディア生産研究への招待

「‘今、ここから’生産研究という主体と問題意識をふりかえる：ジャーナリズムと批判的生産研究との結合を中心に」(李ギヒョン、黄キョンア)は、批判的ジャーナリズムと生産研究のコンビネーションにおける核心の事例を詳細に検討し、生産研究に力が注がれてきた問題意識と対案的なアプローチ方式の成果と含意を具体的に論議した。「‘社会告発’から‘探索報道’番組への進化：テレビ時事ジャンル形成と政策の歴史的文脈(白美淑)は、KBS<追跡60分>で開始された社会告発の番組から探索報道番組<ニュースビジョン東西南北>にいたる時事ジャンルが進化していく過程について分析した。

(3) 第101号 2020年6月

①企画論文：メディア生産研究への招待

「メディア生産研究の系譜：研究の伝統と資源の継承および断絶」(朴ジンウ)は、言論学研究における「メディア生産(者)」の研究史的背景と知的資源を検討することで、現在の生産研究との間に、継承と断絶が、どのような関係にあるのかを分析した。「メディア生産(者)研究の方法論的争点：伝統的メディア対象研究を中心に」(イム・ヨンホ)は、これまで韓国での伝統的なメディア関連生産(者)研究の動向を分析し、主として研究設計と分析過程で発生した方法論的争点について検討した。「メディア生態系における変化と生産者研究」(李ヒウン)は、次第に可視化されているメディア生態系の特性と変化を理解しなければならない理論的必要性を提示し、そのメディア生態系のなかで生産者研究が、インフラ研究と出会う可能性を指摘した。「流動する青年らのメディア労働：2・30代のメディア生産者を中心に」(李ソルヒ、洪ナムヒ)は、外注／独立制作者PD、総合編成チャンネルPD、ウェブ企画コンテンツ制作者の代表制作者、YouTubeクリエイター、フリーランスPDなどメディアコンテンツ制作産業で多様な「周辺部」となっている20代、30代の労働者青年9人にインタビューを実施し、メディア産業の労働状況と、その構造的な問題を照らし出した。「プラットフォーム生産者と日常性：日常Vloggerの生活と労働」(金イエラン)は、日常のVloggerの現象において、逢着された新たなメディア生産者を「プラットフォーム生産者」として概念化し、その開始と成長、労働過程、作品の美学的特性、社会的関係の含意、経済的条件と対応戦略、職業的アイデンティティを分析した。

②一般論文

「オンライン・ヘイト表現規制の争点と対案：規制機関担当者、市民団体活動家、研究者および被害経験者深層インタビューを中心に」(金スア、金ミンジョン、李ドンフ、洪ソンイル)は、オンラインにおけるヘイト表現規制の現実と対案について、関係機関の行政担当者および被害経験者、研究者に対するインタビューを通じて、検討を行った。「フェイク・ニュースとファクト・チェックニュース露出集団のメディア利用とニュース認識、そしてリテラシー関係」(金ヒョンジ、鄭ウンリョン、金ウンミ、ヤン・ソウン、李ジェウ、カン・ミンジ)は、多重のチャンネルで同時にあらわれたフェイク・ニュースとファクト・チェックの受容が、どのような認識の差異をみせるのかを検討することで、批判的なニュース利用能力を涵養するための教育戦略とジャーナリズムの発展方向について論じた。「犯罪ニュース生産慣行研究：慣行の形成要因と実践的解法」(朴ヨンフム)は、慣行を改善する過程で、記者の役割が持つ重要性に注目し、前・現法曹出入記者とのインタビューを通じて法曹ニュースの生産慣行の実態と原因を把握し、歪曲された慣行を改善するための実践的解法を模索した。「大学生のAIスピーカー利用に影響を与える要因に対する探索的研究：疑似社会的相互作用理論と期待一致理論を中心に」(白サンギ、張ビョンヒ、金ホン)は、テレビ、インターネットなどの既存のメディアとは異なり、主に個人空間において一人で使用するAIスピーカー利用に影響を与える要因を明らかにするために、大学生によるAIスピーカーの利用について分析した。「デジタル・インパクトと専門職主義が言論労働の職務満足に及ぼす影響研究」(李ゴンヒョク、元スクギョン、鄭ジュンヒ、安チャス)は、主としてデジタル・インパクトとしてあらわれる取材慣行の変化と権威的経営スタイルが、どのように新聞従事者の労働集約度を強化させ、職務満足度を低下させるのかについて、労働組合とともに実施した世論調査を用いて、分析した。「犯罪ニュース・ヘッドライン言語と意味構成：ポータル・サイト‘NAVER’に報道された犯

罪類型別意味ネットワーク分析を通じて」(李ワンス、崔ミョンイル)は、ポータル・サイト‘NAVER’に報道された韓国における4大犯罪を類型別にカテゴライズし、この意味ネットワークの分析を通じて、犯罪ニュース・ヘッドラインの言語構成を体系的に分析した。「言論は済州4・3を、どのように報道するのか：保守紙と進歩紙、地域紙の比較研究」(鄭ヨンボク)は、韓国の歴史上、ひとつの地域で発生した民間人虐殺では最大の犠牲を強いられた済州4・3について、2000年4・3特別法の制定と2003年4・3真相調査報告書の確定、2014年の国家追念日の指定などの一連の出来事について、韓国の保守新聞と進歩新聞、地域新聞が、どのようなフレーム類型を通じて報道したのかを分析し、理念的性向と地域性の相違を明らかにした。「＜アナと雪の女王2＞に現れたジェンダー再現の問題：＜アナと雪の女王＞との叙事構造の比較を中心に」(チュ・ヒョンイル)は、＜アナと雪の女王＞と＜アナと雪の女王2＞の叙事構造を比較することで、前者に比べ、後者がジェンダーの再現問題に関し、どのように変化を示しているのかを明らかにし、＜アナと雪の女王2＞のジェンダー再現が有する意味について議論した。「韓国人の気候変動についての脅威認識地形導出：深層インタビューを通じた専門家と一般人の脅威認識比較」(韓ビィナラ、金ヘジョン、金ヨンウク)は、韓国人の専門家と一般人の気候変動に対する認識について比較し、これらの認識が、気候変動への対応に関する公衆の行動意図および政策支持に、どのように影響を及ぼすのかについて分析した。「ニュース・リテラシーがフェイク・ニュースの影響力知覚と規制態度に及ぼす影響：フェイク・ニュースの範囲認識の調節効果」(許ユン Chol)は、第三者効果の枠組みにおいて、ニュース・リテラシーが、フェイク・ニュースの影響力の知覚と規制の態度に、どのような影響を及ぼすのかを解明した。

(4) 第102巻 2020年8月

「メディア文化研究における映像方法論の活用のための方法論的省察：参与とデジタル環境の問題を中心に」(キ・イェジュ)は、メディア文化研究において映像の学問的利用を検討し、既存の映像方法論を参与的映像方法論を拡張することで、参与的映像方法論が、どのような活用可能性を持ちうるのかについて、その機能とともに考察した。「信用貨幣の空間生産研究：Hyundai カード広告テキスト分析を中心に」(金ジョン)は、広告の空間再現、都心の再現空間、空間再現と再現空間間の相互テキスト性を知覚する空間実践を通じて、どのように信用貨幣の空間が生産されているのかについて、Hyundai カードに注目して分析を試みた。「メディア利用者パラダイムの再構成：‘批判的政策’の技術遂行的含意」(李クァンソク)は、カルチュラル・スタディーズの核心テーマのなかの一つとなっている利用者研究の同時代性について批判的探索をおこなった。「テレビが提供する‘人文芸能’の特徴と明暗：＜アルスルシンチャップ＞に関する重層的なテキスト分析を中心に」(李ギヒョン、蔡ジョン、金ジス、ユ・ハビン、李タンビ、シン・ジョンウォン、呉ヒスク、玄ヒジン、李ナムギョン、李ソルア)は、社会的に大きな話題となり、論争を引き起こしている、いわゆる「人文芸能」の特性と文脈について、バラエティ番組＜アルスルシンチャップ＞に焦点をあてて、多面的に考察した。「クリック誘導性ニュースが一般的なニュースの利用に及ぼす効果」(李ソンミン)は、記事のテーマや主要な情報を伝えず、本文にない内容に言及するクリック誘導性ニュースについて、利用者を刺激する扇情性と利用者を欺く欺瞞性に概念化したうえで、ニュース利用者500人余りを対象にオンライン実験を実施することで、クリック誘導性ニュー

スがニュース利用に及ぼす効果を明らかにした。「記憶の超国家的移動と多方向的接合：香港市民らの闘争が呼ぶ民主化運動の記憶」（李ヘス）は、2019年6月の逃亡犯条例改正案反対から始まった香港のデモにおいて、デモ隊が国家暴力に対抗する方法で過去の民主化運動の記憶（1989年中国天安門事件、2014年香港の雨傘革命、1980年韓国の民主化運動）を呼び戻す現象に注目し、multidirectional memory 理論にもとづいて、香港のデモの展開と様相を追い、非同時的に散在してきた記憶の接合がもたらした効果と社会文化的含意について導出した。「民族紙神話の生成と屈折」（蔡白）は、「東亜日報」と「朝鮮日報」が植民地支配に抵抗し、民族のために闘った民族紙と評価される一方、昨今、市民団体が清算しなければならない新聞として批判されるなど、両紙をめぐって正反対の評価がなされていることについて、民族紙の神話という観点から分析を試みた。

（5）第103巻 2020年10月

「アメリカ覇権の助力者あるいは他者主義促進者？：‘コロナ19’をとりまく国際社会の覇権競争と国内言論の言説政治」（金ソンヘ）は、覇権戦争の言説と結合したコロナ19を事例として、韓国国内の言論が、どのように公論場の管理者となっているのかについて分析した。「女性ゲーマーは、銃をとることができるのか？：FPS ゲームをプレイする女子絵の身体に対する現象学的研究」（金ジユン）は、ゲーム共同体における女性差別的な文化が、女性ゲーマーに対して、どのように作用しているのかについて現象学的な身体観から分析した。「女性嫌悪言説の競合と共存：小説＜82年生まれキムジヨン＞現象を中心に」（金ヒョン、孫ビョンウ）は、最近の「キムジヨン現象」を引き起こした小説『82年生まれキムジヨン』を中心として、差別的な社会構造に抵抗する小説と、彼女らを取り巻く女性嫌悪の言説変化を捉えることで、韓国社会に根深い女性嫌悪現象に亀裂が生じる可能性について検討した。「コンピューティショナル・プロパガンダについての探索的試論：政治的 bot と社会政治的意味を中心に」（ユ・ヨンミン、金ソンヘ）は、コンピューティショナル・プロパガンダの現象に関する探索的試論を試みることで、bot のような非人間要素と結合した新たなプロパガンダ慣行と、その意味についての学界の関心と共同体次元の論議を進展させた。「‘情報公開法’上の個人情報保護と公益の調和：コロナ19パンデミック下のプライバシー侵害を中心に」（李クンオク）は、「公共機関の情報公開法」の例外規定である「個人の自由と私生活侵害の保護」のうち「公益や個人の権利救済」に注目し、コロナ19パンデミック下での感染者の個人情報および位置情報の公開時に発生する法的問題と盲点について検討した。「朝鮮朝太宗時期の主要な社会経済的懸案の処理と臺諫言論の役割：奴婢関係法令の整備および楮貨法の施行を中心に」（李潤馥）は、奴婢関係の法令整備および楮貨法施行を事例として、臺諫が、当時の国政運営過程において、どのような役割を果たしたのかについて分析した。「全国日刊紙の地理的分布と類型間競争様相」（イム・ヨンホ、崔チャンシク）は、全国紙を5つの分類・区分し、それぞれの地理的な分布状況と特性、そして各類型間の関係について、4つの圏域および16の行政区域別の浸透率を通じて解明した。「韓国テレビ家族ドラマを通じて見た1990年代以後、対人コミュニケーション関係の変化：蔡白、カン・スンファ、許ユン Chol」は、同一の原作で1996年と2017年に制作された二つのテレビドラマを対象に、そこに登場する人物のコミュニケーション関係について分析した。

(6) 第104巻 2020年12月

「コロナ19に対する死の顕著性が政府対応への意見両極化に及ぼす影響：選択的露出の媒介効果と政治的性向の調節効果を中心に」(金ヨンウク、金ヘジョン)は、コロナ19に対する死の顕著性が、政府の対応に関する意見の両極化に及ぼす影響に、どのような選択的露出の媒介効果と政治的性向の調節効果を引き起こすのかを明らかにした。「韓国言論の犯罪報道、何が問題なのか：事件記事と犯罪ニュース・モニター集団深層インタビューを通じて」(ヤン・ヨンユ、李ワンス)は、事件記者集団とニュース・モニター専門家集団が、犯罪ニュースについて、どのような認識と評価、そして視角を有しているのかを解明した。「SNSのニュース・コンテンツ利用動機がコンテンツ類型別利用料に及ぼす影響：参与行為の媒介効果検証を通じて」(張ジョン、ジョン・カヨン、ユ・セギョン)は、変化するメディア環境において、人々が、どのような目的を持ってソーシャルメディアで、ニュースを利用しているのか、その利用動機を考察し、代表的なコンテンツの類型別利用量に影響を与える利用者の参与行為が有する媒介効果について検証した。「‘# MeToo’以後、ジェンダー・イシュー報道の成果と限界：崔イスク、張ウンミ、金セウン」は、# MeToo運動以後、ジェンダー問題報道に現れた進展が、どのようなものであり、依然として残されている問題について検討し、今後、言論が、どのような問題を重要視して考慮しなければならないのかについて提言を行った。

3. 『言論と社会』

(1) 第28巻第1号 2020年2月

「貧しさの再現の政治学：映画＜パラサイト＞を中心に」(韓ソンヒ)は、韓国社会において、解決されずに存在し続けている社会的両極化現象を扱った映画＜パラサイト＞を手がかりとして、映画における貧しさの再現方式と、それを土台に繰り上げられる制限の政治について分析した。

(2) 第28巻第2号 2020年5月

「映画と‘ポリティカル・コレクトネス’に関する論争：＜キャプテン・マーブル＞と＜アベンジャーズ：エンド・ゲーム＞、＜リトル・マーメイド＞を中心に」(韓ソンヒ、李ヒョミン)は、2019年に話題となったディズニー映画を取り巻いた「ポリティカル・コレクトネス」論争を検討し、韓国社会における「ポリティカル・コレクトネス」が、どのように想像されているのかについて批判的に考察した。

Critical Forum

「見知らぬ他人の死のイメージを前に：チュ・ヒョンイルの＜＜写真と死＞＞に対する批判的読解」(金ビョンソン)は、「死の写真」というテーマで「死の再現」問題と写真が陽性する「他人の苦痛と死に対する倫理的問題」を考えるチュ・ヒョンイルの『写真と死』を批判的に読み解いた。

(3) 第28巻第3号 2020年8月

「批判の科学性と方法の規範性：批判コミュニケーション論小考」(カン・ジェホ)は、韓国における批判コミュニケーション論の発達と展開過程について、4つの理論的戦略、すなわち文化帝国

主義批判、脱西欧化、脱植民化、土着化で再構成し、評価した。「報道された貧民村と報道されない貧民村：脱植民主義的に貧困の空間を読む」（タク・ジョンハン）は、貧困が密接した空間、そして、そこに居住する貧困な他人が、大衆に、どのように描写されてきたのかについて分析した。

（4） 第28巻第4号 2020年11月

「プラットフォームの先有と抵抗：配達プラットフォーム労働と AI 労働の社会的構成」（朴ソンヒ）は、AI をはじめとしたデジタル技術が、主として経済成長と雇用創出という観点で議論されてきた現実の問題意識を置き、AI アルゴリズムで運用されるプラットフォーム労働についてコミュニケーションの観点から検討した。「権力と抵抗：パレーシアと対抗導き、そして方法としてのコーディング教育」（朴スニイル）は、フーコーが向きあった権力と抵抗のアプリオリにしたがい、それを現在性の平面に位置付け、新たな読みを試みた。

企画論文

「ジャーナリズムの境界解体、持続、あるいは進化的再形成：システム論的分析機能性の探索」（朴ヨンフム、鄭ジュンヒ）は、伝統的ジャーナリズムの危機を境界の解体、すなわち「脱境界化」概念を中心に分析し、ルーマンのシステム論を通じて、ジャーナリズムの転換という経験的現象を説明した。

Critical Forum

「ネットワーク研究はコミュニケーション研究となれるのか：情緒的コンピューティング（affective computing）に関する科学レトリック小考」（成ミンギユ）は、人間のコミュニケーションをコンピューター演算と同一視し、正当化する一連の工学的、神経生理学的アプローチについて批判的に考察した。「韓国言論学の過剰と欠乏」（チョ・ハンジェ）は、韓国における言論学研究において、何が過剰であり、どのようなことが欠乏しているのかについて、学問・教育の基本制度に該当する「（制度）構造的側面」と、その社会の知的文化の一部である「学術文化」に照らして検討した。

（1） 車の論文は、『ジャーナリズム&メディア』（日本大学新聞学研究所、第15号）に全訳が掲載されている。

詳しい内容と解説は、そちらを参照していただきたい。https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/journalism/journalism_15/each/11.pdf